

金^{キム}

秀^ス

煥^{ファン}

在日三世としてウトロに関わって

くそこから見えた人権と日本社会



プロフィール

一九七六年在日コリアン三世として京都市に生まれる。幼少期から大学まで朝鮮学校に通い、卒業後は在日コリアンコミュニティに関わる仕事に従事。十年前からウトロ地区にある南山城同胞生活相談センターで勤務。ウトロ地区に年間約千人が訪れる日韓市民の案内を務める。

○司会 ただいまより、令和二年度講座「生きること」の第三回目を開催いたします。

本日はお忙しい中、ご参加いただきまして誠にありがとうございます。

それでは、本日お招きしました講師、金秀煥さんのプロフィールを簡単にご紹介いたします。金秀煥さんは、一九七六年に在日コリアン三世として京都市に生まれ、幼少期から大学まで朝鮮学校に通い、卒業後は在日コリアンコミュニティに関わるお仕事に従事され、十年前からウトロ地区にある南山城同胞生活相談センターで勤務されています。ウトロ地区に年間千人訪れる日韓市民の案内等を務めておられます。

それでは、金秀煥さんをお迎えしたいと思います。皆様、拍手でお願いいたします。(拍手)
それでは、金秀煥さん、ご講演よろしくお願いたします。

○金秀煥 皆さん、アニョハセヨ。こんにちは、初めまして。ただいまご紹介いただきました金秀煥と申します。本日は大変お忙しい中、また、このコロナ禍という、何かと不安と心配が付きまとうこのご時世に、このようなたくさんの方々にお集まりいただき、大変うれしく思います。

本日、「在日三世としてウトロに関わって」というお話をさせていただきますと思います。まず、そのウトロ地区に関しましては、後でお話しをさせていただくのですが、皆様のお手元にお配りしたパンフレットがございます。これは韓国の方に作っていただきました。韓国の女優さんでソン・ヘギョという方を御存じですかね。とても有名な方なのですが、その方が支援をしてく

ださったんです。韓国の人だけじゃなくて、日本の人もウトロの歴史とウトロであった物語を皆さんに知っていただきたいということで、日本語と韓国語、両方の文字で書かれているもので、ご説明は後ほどさせていただきます。

この講座の企画として、いろんな体験を一人称で語るといってお話しを、私も事前に聞いておまして、元々このような場では、在日コリアンについてお話しをするとか、ウトロ地区についてお話しをするという形が多くて、いつも私の経験を客観化、客体化してきたんです。まあ、私自身、個人のストーリーとか、何か大きな成功をした人間でもなければ、ドラマチックな何かがあったわけでもない。ですので、そういった客観化、客体化させたお話しを常々やっていたところなんです。この度はこのような形で、私の経験としてお話しをさせていただけるということなので、新しい、慣れない形ではあります。それでもこのような取り組みは、いろんな経験をしてきた私にとっても、とても大事です。よくよく考えれば、やはり一人称で語るというのは、とても大事なことだと思えます。民族だとか人種、国籍の問題にスポットを当てると、私はここにいらつしやる皆様と比べて、マイノリティに属する人間になります。当然、この中にも、民族的、国籍的にマイノリティの方はいらつしやると思うんですけれども、いつもマジョリテイ相手にマイノリティを客体化させて、何か答えを求められているような、そういうプレッシャーもありましたし、そういった苦しさというのも正直ありました。タレントのウーマンラッシュアワーの村本さんを皆さんは御存じですか。漫才のネタとしては、ちょっときついお言葉で、言葉数

が多いのですが、彼は社会的な問題に対する発信もたくさんして、沖縄の問題であったり、LGBTの問題であったり、また、外国人の問題もしているんです。彼が朝鮮学校の高校無償化裁判で負けた、その集会に現れたんです。広島だったのですが、そこで話してくれたのが、自分もいろんな社会問題を新聞では見るが、それは全て、私の中では文字となっている。文字として私に入ってくる。しかし、その当事者と出会って、その人の話を聞いて、その人の心の内を聞くと、文字が急に声に変わるといふ話をされたんです。今まで文字として、自分と自分の関連するもの以外は全て風景となっていた。そういつたものが、本当に人と交わることによって、人の心と触れることによって、それが声となって、その声に秘められた気持ち、そこに「助けてくれ」なのか、「分かってくれ」なのか、「理解してくれ」なのか、いろんなものが入ってくるということなのです。私も先ほど、国籍、民族的な問題で言えば、私はマイノリティなんですけど、他の問題に問題設定すると、私は圧倒的なマジョリティになっているときもたくさんあるんです。性別の問題であったり、身体の問題であったり、その他いろんな問題で。私も当然いろんなところのものに耳を傾けて、そういう人たちと共にしたいと思えますし、また、今日お集まりの皆様も、変な外国人が変なことを喋るから聞いてやろうという方はいらっしやらないと思いますので、そういうお気持ちを持っていただいた方と、声と声で、心で、気持ちでつながって、いろんなつながりが今後できていけばという思いを込めて、ちょっと拙い話ではございますが、私個人のいろんな経験、ウトロ地区での活動であるとか、自分史の中での話をさせていただきたいと思えます。

先ほど、私の名前の紹介がありました、金秀煥と申します。元々、日本名というのもあったのですが、私の場合は「金原」です。この姓の金に原っぱの原をつけて「金原」というふうの名乗っていました。私の祖父が朝鮮半島から渡ってきたのですが、その祖父が会社を、工場を建てたんですが、そこも「金原パイル工業」という名前を使っていました。在日の方はこの日本式名、昔は通名と呼んでいたのですが、本名で暮らす、朝鮮名で暮らすと、いろんな煩わしさがあるので、日本名を名乗ることがあったのですが、私はご覧のとおり、下の名前が「しゅうかん」と日本語で読むので、「金原」と名乗ろうが、下の名前ですぐにばれてしまうので、基本的に今は、通名のほうは名乗っていません。出身地は京都市北区になります。在日三世なので、私の祖父母が朝鮮半島から日本に渡ってきて、私の両親も日本で生まれて、私も日本で生まれました。今、一人の娘と一人の息子がいますので、その二人は在日四世として暮らしています。そのような経緯、ルートがあります。本籍地としては、皆さん、韓国の地図が思い浮かぶでしょうか。慶尚北道というところなんです。この慶尚北道、下に行くとならぬ、南の道となりまして、そこには有名な釜山があり、その一つ上の地区なんです。私の祖父が慶尚北道から渡ってきました、祖母は慶尚南道、釜山の近くから渡ってきました、日本で出会って結婚をするということなんです。今、在日コリアンと言われる方は、朝鮮半島にルーツを持つ方で、大阪は特に、一般的には慶尚道というところの出身者が多いです。地理的に日本に近いということ、経済的にも苦しかった地域だそうです。朝鮮半島というのは東側に大きな山脈がずっと通っていますの

で、どちらかという上山岳地帯になります。山脈をはさんで西側は穀倉地帯となりますので、昔は西側のほうが豊かだったんです。大阪はこの慶尚道から渡ってきた人たちも多いのですが、その下の済州島からの方がとても多いです。一九四八年、終戦後なんです、その済州島で四・三事件という、とても痛ましい、南北の分断という政治状況の中で、島民がすぐく弾圧される事件がありまして、それを逃げるために大阪に来た人が多いのです。慶尚道出身者も日本には多くて、これは、私は面白いと思うのですが、皆さん、どう思ってお聞きしたいのですが、チヂミという食べ物をお存じですか。韓国のおべた焼きみたいな感じなんです、チヂミってソウルの人は分らないんです。ソウルの人にチヂミって言ってもほとんどの方が分からない。分かる人は、最近日本で流行っているあれだよって言うんです。何かというと、そういうべた焼きみたいなものは、ソウルでは標準語ではチョンとか、プッチングと言います。チヂミとは何かといいますと、慶尚道の方言で、焼くというのはチヂダと言うんですが、焼いたものをチヂ、それが訛ってチヂミという形になって定着したんです。日本ではチヂミという呼び名はスタンダードな標準語になっているんですが、実は韓国ではそうじゃない。慶尚道の方言が使われているということは、戦争時代にたくさん渡ってきた人たちが食べていたものが、在日の人たちを介して日本に定着したという歴史があります。もう一つ言いますと、これも驚いていただけるか分からないのですが、焼肉って当然御存じですよ。焼肉の韓国語はないんです。うん？ってなりますよね。皆さんが思い浮かべる焼肉といえは、鉄板で肉を焼きますよね。韓国では、もともと、こういう焼き方は

豚肉だったんです。韓国ドラマでよくドラム缶で豚肉を焼いています。日本ですべて焼肉のスタイルではないんです。今までは、焼肉のことを韓国語でプルコギ、火の肉というふうに訳されていたのですが、実際の韓国のプルコギは、日本の焼肉スタイルではなくて、すき焼きみたいな形なんです。焼肉はどういうものかと、韓国の留学生たちに、最近質問で投げたのですが、みんな止まってしまってます。そして、ないということに気付くんです。今あるスタイルの焼肉というのは、在日の人たちが昔、食べるものがなくて、日本人たちが捨てるもの、一説では捨てていたホルモンを拾ってきて、全部、腸を洗って、排せつ物を洗って、ああいう形で食べていたんです。生活もちょっと落ち着いたのか、もっと焼いてみようということで牛肉も焼きだした。そのスタイルが日本で定着して、今、日本で食べているような焼肉の食べ方は、韓国よりも日本のほうが先なんです。それが韓国に渡って定着しているということ、日韓の文化交流の中でも、在日の人たちが果たしている役割が多いんです。在日の人にとっても、当たり前のこと、よくよく考えてみると、チヂミという言葉が韓国人が知らないとか、焼肉の韓国語はないとか、改めて考えると、結構面白い話もたくさんあるということです。よくよく考えたら、これ面白いなっていうのを、異文化を知ってるがゆえに感じるところが多いです。

日本の方に、韓国語講座とかハンゲル講座もしているのですが、きれいに訳せない、直訳できない言葉もたくさんあります。そうになると、日本語も結構面白いんです。「いる」と「ある」の違いって、皆さん、御存じですか。「いる」と「ある」。大体、みんな、人が「いる」、もの

は「ある」と言います。でも、魚が水の中に「いる」ですよね。魚が冷蔵庫に「ある」。ということは、人とかではなくて、命があるかないかで、「いる」と「ある」を分けるそうなんです。本当に命の尊さというか、命を大事にする、これは日本の文化なんでしょう。韓国語にはないんです。いただきますの挨拶でも。ほとんどの諸外国では、神様にお祈りをしたり、作ってくれた方においしくいただきますという挨拶があるのですが、日本のいただきますは、そのものに対する神が宿っている。全てのを尊重、愛する、畏怖すると言いますか。そういう文化というのは、やはり、私たち朝鮮半島の文化を知っているので、ああ、すごいところがあるよねっていうのも分かるんですね。反面、日本語に訳すことができない、日本語では解釈しにくい朝鮮半島の文化であるとか、そういったことも分かるようになるので、すごく得してるような気がするんです。異文化を知るといえるのは、進んで自分がいいことをしようというよりも、本当に自分のためになるのだなど。自分のものももっと好きになりますし、ほかのものの素晴らしさも知りますし、それと比べて、自分たちがもっと大事にしなければいけないところに気付くというところで、そういう経験というのは、私は在日として、このルーツに向き合って生きているところから、感じるどころがたくさんあるというところを、まず、お話しいたしました。

次に、先ほど紹介もいただいたのですが、私は一九七六年に生まれ、京都ですつと民族学校、いわゆる朝鮮学校に通っていました。在日の人々の朝鮮学校への就学率は、十%もないぐらいなんです。在日の人が朝鮮学校に通っているということに対して、違和感はないと思うのですが、

決してスタンダードな形ではないんです。私自身は兄弟が三人いまして、男三兄弟の末っ子に
なるのですが、朝鮮学校に入るときに、両親がとてももめたという話をたくさん聞いています。
何かといいますと、私の父方の兄弟は、男性が三人、女性が三人の兄弟なんですけれども、男性
三人は全て日本の学校に通っているんです。逆に女性三人は朝鮮学校に通っているんです。私の
祖父が、朝鮮の伝統文化、そういったものは大事にしないといけないが、私たちは日本で住んで
いてハンデが多いからこそ、日本のことをもっとよく知って、この社会に適応して、この社会で
飯を食って、当時の考え方で言いますと、家族を養わないといけないから、男はみんな日本の学
校に通いなさいと。女性は当時の考え方のままなんですけど、どうせどこかに嫁ぐんだから、嫁
ぎ先で文化・風習を体現できるように、朝鮮学校で学べという考え方だったので、そういう図式
の中で、私の父は日本の学校に通っていました。同じマインドだったと思うんです。男は日本の
学校に通って、金稼いで、家族を養えといいますが。私の母方は、男性も女性も全て朝鮮学校を
出て、私の母は中学で転入したのですが、小学校で日本の学校に通っていたときに、本当にいい
経験がなかったそうなんです。いろんな差別体験、いじめ体験があるのですが、私の母がよく言
うのは、友達に、周りの人にいじめられたっていうのは余りないと。小学生の時にいつも先生か
ら、直接的な意地悪じゃないのですが、何かあなたは違うよね、あなたはみんなと違うからとい
うことを常々言われて、それがすごく嫌だったそうなんです。そこから朝鮮学校に行ったのです
が、その朝鮮学校に行ったときの、その解放感たるやというところで、今まで自分がみんなと違う

ものとして、異質なものとして扱われてた部分が普通になって、当たり前になって、何も隠さなくてもいい、何も悩まなくてもいいのが、すごくよかったということで、母は何が何でも朝鮮学校に入りたいと、そういう人だったそうです。私の兄が入学するとなった、一九七五年頃の男性と女性の関係は、今もそうなんですけれども、全然フェアではないですよ。私の父のイメージというのは、いつも晩御飯のときにテーブルに五品以上のおかずがないと駄目な人で、白御飯と絶対スープが必要な人なんです。みそ汁などでは駄目なんです。ワカメスープ、もやしのスープ、卵スープ、テールスープ、どじょうのスープ、いろんな韓国のスープがないと駄目な人で、子ども心にカレーライスをあまり食べたことがなくて、カレーライスが家で作られていたら、ああ、今日はアボジが帰って来ない日なんだと。オモニは楽しんでいいよと。父親は辛いものが好きで、コテコテの朝鮮料理が大好きな人で、オモニがちょっと頑張って、洋風の小洒落たものを作ろうものなら、ちょっと味見して、「もう要らん、下げろ」という人だったんです。これも面白い話なんです。私たちが朝鮮学校に通っていたときに、朝鮮民族には儒教の思想、男尊女卑があるということで、授業でそれはもうなくさないと駄目だと先生がおっしゃっていて、男の子も台所に立って、お母さんのオモニの手伝いをしましょうというのがあったんです。その当時は私もすごく純粹だったので、帰ってからですぐやると、アボジがすごい剣幕で、「男は台所に立つな、絶対にあかん」と言う人だったんです。でも、今となっては、家で水割りを作るときも、一人でひたひたと台所へ行って、カランカランと一人で水割りを作ってたしなんですよ、とてもい

い時代になったなと思うのですが、そういう力関係の中で母親、オモニは子どもを朝鮮学校に入れないと離婚すると言うまでの覚悟でやりました。そのとき、父の決断は気持ちに負けて理解をしてみたのか、あるいは、その離婚というリスクを勘案して負けたのかは分からないですけれども、結局、最終的に朝鮮学校に入れた後で、父はとても満足をしていました。友達との関係だとか、コミュニティの関係性が自分たちは分からないことであって、入れてみると、とても温かい人間関係があつて、入れてよかつたと言つてもらつてます。そのような形で朝鮮学校へずっと通つていたのですが、この学生時代に差別体験というのは、私の中でないですよね。つらい思つていふのがないんです。いろいろ思い浮かべてみると、一つは私の名前なんですけれども、私の名前は私の親が作ったんじゃないで、当時、一九六〇、七〇年代で北区にも在日の人たちがたくさん住んでいました。西陣という地域になるんですが、西陣織とか御存じですよ。西陣織に従事する朝鮮人たちが多かつたのですが、決して朝鮮人たちが、きれいな刺しゅうを縫つたり、呉服問屋、一番儲かる仕事をしてたわけではなく、洗いとか蒸しとか、西陣織の最下層の一番しんどい仕事なんです。川に入って水で洗うとか、蒸し器の中で蒸すのに、とても暑い中で仕事をしていました。当時、その町内の有士、名士の方がいらつしやうって、その方に全部名前をつけてもらつていました。僕らもそれが当たり前だと思つていたので、全然、その差別体験というのではなかつたんですね。むしろ、日本の人に怒られることがあります。ちょうど小学校四年生ぐらいでしょうか、物心ついたぐらいのときで、今まで、アボジ、オモニと普通に言つていたので

すが、「あれ、ちょっと違うぞ。アボジ、オモニは日本語じゃないぞ」と思いまして、なじみの駄菓子屋さんで「今日はお母さんのお使いで来ました」と言うと、その駄菓子屋のおばちゃん、日本の方ですが、「お母ちゃんつて何や、オモニと言いなさい」と、逆に怒られたんです。そのぐらい、しつかりとしたコミュニティがありましたし、その社会の雰囲気を感じる、何かちょっと私は異質である、どうなんだろうというのも、地域社会がカバーしてくれて、むしろ、私をしつかり導いてくれた。食べ物、キムチの臭いでよくいじめられるとか、そういう話は言語として聞いたことはあったのですが、むしろ、近所の日本人の友達は、うちのオモニのスープがおいしいので食べたいから作ってくれと言われました。私がいろんなところに行つて、明日作るらしいから、鍋持つて並びに来いと伝える、近所の人々が鍋を持って並ぶんです。そういう優越感にいつも浸っていました。また、そういう経験で、いろいろ気持ちの中であったのが、当時の少年雑誌などを読んでいて、懸賞のプレゼントコーナーに応募するために、名前をどっちで書くのかなど悩むことがありました。「金」で書いたらはねられるのではないかと。これは立証できていない話なんですけれども、自分のイメージの中でそういうのがあったんですよね。数少ない懸賞、日本人の子どもたちが羨望の眼差しで応募する懸賞において、私が外国人として応募しても当選しないだろうなという気持ちがありました。「金」で書くか、「金原」で書くか、ずっと悩んだんですけれども、最終的には「金原」で私は書いたんですが、下の名前が秀煥になっているので、これもばれるのではないかと結局送りませんでした。子どもながらに、そういう悩みをしてたこと

をちょっと思い出されます。朝鮮帰れという言葉も何度も投げかけられたことがあります。しかし、これは、私にとって何ら傷を与えるものではなくて、むしろ、それしか言えないんでかわいそうなんだという気持ちになります。よく喧嘩になって揉めると、日本の子どもたちは言うわけなんです、朝鮮帰れと。その言葉については、我々には、コミュニティがあったので、何を言っているんですかと、何の話なんですかと。あなた、それしか言えないんですかと、相手の敗北宣言のように捉えていました。

高校に入学すると、まず、外国人登録証明書というものを発行しないといけなかったんです。今でも外国人登録というのは十六歳になるとしなければなりません。私たちは、特別永住資格があるんですけども、特別永住資格がある人たちでも、当時は登録をしないといけないということでした。今は、特別永住者証明書に制度が変わりました。当時、朝鮮学校や、在日の人たちのコミュニティで切り替えに行くのですが、一人で日本の行政に乗り込んでいくと言ったら大げさですけど、外国人登録係というのは、市民窓口課の裏から通って、ずっと中に入って、裏手でやるんです。それが、やっぱり、何て言うんですかね、差別をしているというよりも、往々にして近所の人にはばれたくないと。外国人登録の窓口で、そこに座っていると、隠している人たちにとってはばれてしまうことなので、たぶん裏に窓口を作っていたと思うんです。そこだけを切り取ると、ある一定の配慮なんです、それを隠さないといけない、ばれてはいけないというような扱い、腫れものの扱いをされていることに、すごく異様な雰囲気を感じました。当時は、まだ、指

紋押捺制度があつた時代なので、私も指紋を押ししました。学校でこれは差別だよ、よくないよと
いうことで言われていたんで、しないとも言えないんで、せめての反抗で、ちよんと押ししては、
もう一回やってください。ちよんと押ししては、もう一回やってくださいと。それが多分、四回ぐ
らい繰り返しただけの抵抗しかできなかったのですが、そういったこともありました。

そういつた中で、いろんな差別がありますよというのを、言葉では聞いてたんですが。特に
深刻な差別体験を感じることはなく、過ごしてきました。その後、学校を卒業して、在日のコミ
ュニティに関する仕事をしだして、朝鮮学校に通っていない子であったり、地域にコミュニティ
がない子どもたちと出会うことで、本当にいろんなカルチャーショックというか、本当に衝撃的
な体験をたくさんすることになります。私は在日の青年学生に対してハングル講座や、コミュニ
ティでの活動など、いろんなイベント企画をするのですが、そこで出会った子の話です。この子
は在日として日本の学校に通っているのですが、ある先生にひどいことを言われたって言うん
です。どうしたのって聞くと、みんな一緒だと、国籍など関係ないよと、そう言われたって言うん
です。私は正直、そのときに、「あれ、それってそんなにひどい？」って言ったんです。彼女か
らしてみると、私は何で日本人にならないといけないの。みんな一緒ということは、日本人と一
緒ということでしょう。韓国人としての私を認めてくれないのという訴えだったんですね。それ
に対して、私は、その子たちの今までの葛藤、自分のアイデンティティはどこにあるのか、いろ
んな悩みをしていく中で、自分のアイデンティティをまだ確立できていない、その若い子たちに、

やはり、マジヨリティ側は包摂しようとするんですよ。一緒にいいじゃん、悪いことじゃないよ、ということなんです。でも、その人たちの文化であったり、バックボーンであったり、ルーツであったり、背景が否定されている状態を放置しながら、そこからこっちに来なさいよというマジヨリティ側の包摂は、すごくこれは暴力的なことなんです。そういう子どもたちに対して、そういうことないよ、自分がしつかりしていたらいいんだよ、差別や偏見、包摂に負けたら駄目だよって言葉も流して、いろいろこうしないといけないよと、いろんな活動をしていたんですが、ある日、同級生の子に、私は一生懸命にやっているつもりだったのですが、スファン君は結局、私たちを見下しているよねって言われたんです。これはすごくいシヨックでした。こんなに私は頑張っているのに、見下しているとはどういうことなんだと言うと、いつもこうしないと駄目だよって、私たちを強要するって言うんですよ。あなたたちは、こうでないといけないよ。私知っているから、あなたたちに教えてあげるよ、ということ。その人たちが何を求めているのか、その人たちに、私はどう寄り添えるのかを考えずに、私が知っているものを、私が考えているものを押し付けていた。考えると、すごく、これも暴力的というか、在日というマイノリティの中で細分化されると、朝鮮学校のコミュニティの中では、私は圧倒的なマジヨリティになってしまいうんですよ。そういう意味で、私は私として、彼女ら、彼らを包摂しようとしていたということに、すごく気付きました。彼ら、彼女らのために何か寄り添いたいと思ってた人間が、全く、その彼らの気持ちになつていなかったことで、私は基本的な軸を踏み外していたんだということ

を、すごく感じました。特に問題に思うのは、私が次、学生じゃなくて、保護者となって、子どもを朝鮮学校に入れたときに、自分が学生ときは差別されてますよ、大変ですよってというのが、仕方がないのではと思うのですが、自分の子どもものことになる、全然変わってくるんですね。自分より大事な存在ですから、そういったものに対する問題点というのをすごく考えることになりません。

先ほど、朝鮮学校の就学が10%を切ると言いましたが、そのほとんどの問題が経済的な問題なんです。朝鮮学校というのは、公立学校はもちろんのこと、日本の私立学校よりも低い扱いをされているんです。公費の補助としては、国庫補助金、国からはゼロです。それに対して、地方自治体の補助金は、出ているところは一部あるんですが、大阪は完全になくなりましたし、京都はまだありますが、当時、自治体の補助金があったとしても、私立学校の三分の一ぐらいなんです。だから、朝鮮学校は、日本の私立学校の三倍の負担を強いられています。そうでないと、自分たちの民族、ルーツに対する教育の場がないという現状なんです。高校無償化の除外に、朝鮮学校はされているのですが、こういう話をするんですね、日本国民の税金を何で外国人に使わないといけないのかという方がいらっしやいます。基本的には、申し訳ないですけど、国民の税金というのは存在しないんですよ。それは、法律上、日本国憲法に対して、私たちがいつも違和感に思うのは、国民主権の考え方の日本国憲法の主語は全部国民なんです。でも税金になると、「国民は」とはなっていないんですね。居住者はとなっているんです。だから、国民の

税金というのは間違った概念で、居住者の税金というのが正しい。なので、私たちも税金を払っているのです、それは教育として還付されない。それじゃ、日本の学校は外国人も受け入れているから、来た方がいいのではとおっしゃるんですけども、それがまさに、マジヨリテイの包摂なんです。あなたたちの文化、あなたたちのルーツ、しかも、過去にとっても不幸な歴史があった中で、それを迫害された人々に対する、それらの保障は、もう皆無に等しい考え方の中で、こういう代案しか示されない。そういった中で、自分たちの子どもを育てるということが、大変な差別構造の中で、今までも続いてましたし、これからも続いて行くような思いを、実際に感じることになりません。私たちマイノリティの問題に関してもやはり、歴史的な考察が必要だと思います。過去の私たちの在日コミュニティは、コロニアルマイノリティと私は呼ぶのですが、ただのマイノリティではなくて、やはり、歴史の中で生まれたマイノリティであり、歴史の中で差別されてきた歴史がある。また、植民地というところの話ですね。そういう根源を置いているということなんです。これに関しても、後でお話できるか分からないので、今お話ししますと、ウトロの研修にある高校の人権担当教員が六十名ぐらい来られまして、ウトロの歴史、現状について語ったんです。前でしゃべっていると、研修を受けている皆さんの表情が分かりますね。今日はそういう方がいらっしやらないんですけど、一人、二人、若い人の中に、ちよつとうがったような目で見ている人がいるんです。この人は、絶対私の話は入っていないだろうなと思っていたのですが、研修後に感想文をいただいたのですが、やっぱり案の定、一人、二人いるんです。私は日本統治

と習ったんで、植民地という言葉にとでも違和感を覚えますということなんです。まあ、その条約自体が韓国併合とかいろんな形で日本に統治権を委ねるといふ形なんですけど、今まで侵略戦争とか、いろんな不条理な戦争があったのですが、侵略戦争するぞって言った人は一人もいなくて、全て聖戦だとか、懲罰だとか、いろんな話を用いています。日本の当時の文献にも、植民地域として台湾とか、朝鮮半島の記載がある文献もたくさんあるんですよ。特に、京都市、宇治市の中学校の歴史教科書を全部拝見させていただいて、今回も枚方市の中学の歴史の教科書もいただいたんですが、すべからず植民地って書いてあるんですよ。だから、その先生は高校の人権担当教員か何か知らないですけども、中学校、ないしは小学校からやり直してくださいと。そういう人たちがいる中で、やはり、この問題については、日本の今の報道でも、日本統治というところで、植民地という言葉はあまり使わないのですが、そういった歴史的な背景の無理解から、やはり包摂の考え方が出てくるんだなど。この社会の歴史的、文化的、文化遺産に対する認知度が、日本の社会ではとても低いということを感じることになりますし、朝鮮学校の高校無償化除外など、それを昇華させるようなケースはすごく出てくるんですよ。さっきも言ったように、日本の学校に行けばいいじゃないの、あるいは本国に言えればいいじゃないのとか、いろんな話が出てきていますが、それが全て子どもたちが学ぶ権利を奪っているという、この現実をごまかすための論理が生産、再生産されている。この恐ろしさをすごく感じますし、それが合理化されてる。ないしは、無関心なんですよ。私とは関係ない。私にとって、そこは新聞、報道で見るけど風

景でしかない。そういう人たちの中で、とても孤立と言いますか、その社会においての私たちの地位、位置が確立されていない。特に、それが自分の子どもに降りかかると、私たちは本当に耐えられないですよ。私の子どもが、まだそういう中で生きていくのかということに置くくと、本当につらい思いをすることになります。本当に若いときの差別、なかった差別体験が社会を知ることによって、本当に現実として感じる、そのような経過を経ています。

このような差別問題もありました。皆さん、御存じかもしれません、ヘイトスピーチという言葉ですよ。確か、二〇一〇年頃にヘイトスピーチが流行語大賞になるんです。二〇〇九年、朝鮮学校に対するヘイトスピーチの直接的な被害者としては、とても苦しい思い出です。「北朝鮮のスパイ、朝鮮に帰れ、お前らは道の端っこを歩け、偉そうにするからこんな目に遭うんだ、朝鮮人とは約束ができない、日本人と朝鮮人は違うんだ」と、子どもたちの前でスピーカーを使って大音量でするわけなんです。これが許される社会ってどうなんだっていうのは、いつも思うんですよ。私が活動もする中、在日の人権問題を一生懸命やって下さる方もいて、いろんな方と出会うのですが、こういう事件があるたびに、「金さん大丈夫ですよ、日本人はあんな人ばかりではないです。日本人にもいい人がいるんですよ」と言われます。私はこの言葉で、今までのいろんな慰めを受けてきたんですよ。この事件を聞いたとき、すっごく腹が立ったんですけど、申し訳ないんですけど。そんな言葉要らないですよ。いい人がいる、それはうれしいですけど、でも、こういうのを許される社会なんですよ。いい人はたくさんいるからといって、

ヘイトスピーチをする人たちが無くなるわけでもないですし、ヘイトスピーチや、人を傷つけること、差別をすることを、なぜ社会として規制できないのか、なぜ法律として規制できないのか、というところの、この社会の在り方の問題について問う。そういう気持ちだが、この問題を通じて生まれることもありました。

朝鮮学校に関することは、国連の各種委員会では、勧告とか、いろいろな注意喚起が出てるんですね。是正しなさいと。高校の無償化問題もそうですし、幼児教育、保育無償化も、朝鮮学校は除外されてます。いろんな各種委員会から勧告が出ていますが、日本ではなかなか報道されていませんし、これを盾に、日本の政治家たちは、どこそこの国は国際法に違反しているなど、よく言うんですけれども、国際常識的に、国際機関の勧告に違反していることを裁判にしても、これは勝てないですよ。日本の司法としては、こういう国際機関の勧告、そういったものは努力目標であると。だからこれを実践していかないからといって、すなわち、それが違法にはならない。立法府の裁量権に帰属するというところで、裁判も全て負ける。そのような状況です。

十月十五日、最近ですよ、東京の朝鮮学校に通う小学生が、投書をしてるんです。ランドセルを背負って、電車通学をしているんですが、ランドセルを叩いてくる人がいると。私が朝鮮学校に通っているということ、「小学生が電車で通学をするな」と、大声で言う。ですが、僕が朝鮮人だと知りながらも、優しく声をかけてくれる日本の方々もいます。怒鳴られた時に、僕を守ってくれた方もいました。嫌がらせをしてくる人もいますが、僕は親切に接しようと思いま

す。そうすれば、嫌がらせがなくなる日が来ると思っています。小学生がこういうことを書くんですよ。この記事を見てですね、偉いね、立派だねっていう人もいるんですけども、私は許せないんですよ。子どもに、こんなこと言わせたら駄目だと思います。

私の中で、ここ十年勤めてるウトロ地区というところでも、たくさんいろんな経験をさせていただいています。ウトロ地区は、歴史背景があるんですが、日本の社会でだとか、日韓の問題になると、とても争いの種になるんですね。歴史の教訓って、みんなが幸せになるためのものなのに、なぜ対立と葛藤のものとして使われるのかということをすごく思うところもありますし、流行りのフェイクニュースとか、反知性主義とか、そういうった問題もウトロ地区でよく感じることがあります。ウトロ地区なんですけれども、宇治市にあります。京都駅よりも枚方のほうが近いですね。近くですので呼んでいただければ、来させていただきます。近くには有名な平等院もあります。ウトロ地区は、宇治市伊勢田町ウトロ五十一番地というところに、約六十世帯の人が住んでいました。みんな、五十一番地なんです。枝番がないんです。だから、郵便局員もみんな、名前を覚えて配達をしまして、新人の郵便局員は、よくこちらのセンターのほうで、ここ何処ですかとか聞いてこられます。九十%以上が朝鮮半島にルーツを持つ人たちが住む集落です。大阪でも京都もそうですが、在日の集住地区っていうのは、たくさんあるのですが、大体三十%、四十%超えると、すごい密集率なんです。ウトロ地区は九十%以上の方が住んでいるので、今の現状としましては、市営住宅が建設されているんですね。立ち退きの裁判がありました。

その裁判で住民たちが負けて、おまえたちは不法占拠状態だから、全て更地にして出て行けという判決が下ったんですが、一生懸命運動をして、土地の三分の一を、いろんな方々の寄附やカンパで買い取り、その上に宇治市が市営住宅を建てて、このコミユニティを守るまちづくりが進んでいる地域です。年間約千人の方が訪れます。内訳で言いますと、韓国から来られる方が五百名、そして、日本の方が三百名、在日の、特に学生たちが、歴史の研修ということで、二百名ほど来ます。ただ、今はコロナなので、全く韓国からは人が来ません。でも、日本の方であるとか、在日の学生であるとか、十月に入って、少しずつ増えてきました。特に韓国の人たちが来るということは、韓国のバラエティでも取り上げられており、こういう歴史問題が、韓国ではバラエティでよく捉え、いろんな番組で取り上げられるんです。日本では社会派の限られた番組でしか取り上げられないんですが、韓国の人たちが今、ウトロをたくさん支援してくれているんです。特に印象深かったのが、セウォル号事件を御存じですか。二〇一四年に、セウォル号が沈没したんですが、その船に当時高校二年生の修学旅行中の学生たちが乗っていて、多くの人は助かったんですが、学生の犠牲者が多かったです。大人たちは我先に逃げて、子どもたちには混乱をさせないために、そのまま、その場にいらって言ったんですね。普通、沈没事故はライフジャケットを着て外に出るのが当たり前なんですが、たくさんの方が大人のことを聞いたがために犠牲になってしまった事件です。この五百人のお客さんの中で、生存した学生たちがウトロに来てくれたんですね。その学生たちは本当に心の、言葉にできないトラウマを持っていて、自分が生き

残ったことが罪のように感じ、亡くなった同級生の親にも会えないというような状況で、また、世間にもすごく注目を浴びましたので、心休まる場所がない。心に傷を負っています。この彼女、彼らは、グループで活動しているんですが、自分たちのこの傷を癒してもらおう活動をしているのではなく、いろんな困ってる人に寄り添う、生きる意味、生きる価値をもう一回考え直そうということ、いろんなところでボランティアをしてるんです。その延長線上で、ウトロにも来てくれて、交流を二回しました。注目を集めているので、基本的にカメラは顔を撮つたら駄目で、記念撮影も後ろを向いて撮影したんですが、そういう彼ら、彼女らが、ウトロの記念として、自分たちの似顔絵をコンテナハウスに描いてくれたんです。体は韓国にいるけれども、気持ちは皆さんと一緒にいますということ、顔を描いてくれて、これを見た韓国の人たちが韓国で傷ついた学生たちが、日本で在日の人たちと、こうやって癒しの時間を持つていることに、本当に感謝するとう、たくさんのコメントもいただきました。さらに在日の学生たちや朝鮮学校に通う子どもたちも来ますし、日本の方の中でも、いろんな研究者、大学のゼミの他、こういう場でお話をさせていただく機会もあるんですけども、企業の連合、グループも来るんです。こういう人権の問題とか、歴史の問題ですね、イメージとしてはすごく理想論的な、やらないといけない、そういうふうに使われているんですが、今、もう社会が変わってきてまして、企業も今、人権にすごく力を入れているんです。ESG投資っていうんですかね。今まで、大企業の中でも投資家というのは、企業に投資する際に、その企業の収益率、どれだけ儲けるかというところで投資の判断

をしていたのですが、そこにプラスアルファとして、企業が社会的責任を果たしているかということにも着目してゐるんです。その企業が環境や社会問題、人権問題にしっかりと取り組んでいるのか、そういったものとしてガバナンスをちゃんとしているかということで、いわゆる、一流企業が人権問題に力を入れています。人権とか歴史の問題、人々の尊厳の問題が、ビジネスの社会でもしっかりと定着していつているんだなというのを感じるとうところがあります。

ウトロ地区なんですが、どういうところかと申しますと、もともとウトロ地区は戦争中に飛行場建設のために集められた朝鮮人労働者たちの飯場があったんです。当時は、一三〇〇人が暮らしていたと言われていました。これはあくまでも証言でしか残ってなくて、資料としてはないんですけども。終戦を迎えて、この飛行場建設が中断され、そのままそこに放置をされる形で、行く当てのない朝鮮人たちがそこに住み着くということになります。その後、その土地が裁判になります。もともと、飛行場建設の場所なので、例えば、軍とか、国家の持ち物としてイメージされると思いますが、当時は、軍ないしは国家が民間業者に委託をして作らせていました。当時工事を請け負っていたのが、日本国際航空工業という日産車体の前身の会社だったので、ウトロ地区は土地も含めてその会社の持ち物なんです。終戦後も日産車体の持ち物としてずっと来ましたが民間企業なんです。民間企業なので、この土地がなかなか上手いこと処分できないんで、第三者に転売をしました。転売を受けた第三者が裁判を起こして、ここから出て行けってなったわけです。そこに住んでた人からしてみれば、いやいや、私たちは、国策に従事した人間であり、

在日朝鮮人が日本に渡日した背景において、ここにずっと放置されて、下水道、上水道、そういったものが引かれなままきたのに、なぜ急に出て行けと言うのかと。日本政府の立場、行政の立場としては、これは民間企業による民間人に対する裁判なので、いわゆる民事裁判なので民間の問題には介入できないということで、行政、国家は何ら対策を取らず、そのまま裁判として進められることになりました。そういつた中で立ち退き問題になったんですけども、裁判になると、そのような構図の中では土地の所有権が優先されますから、ここに住んでいる人はみんな不法占拠者であるということで、最高裁の判断が生まれて、立ち退きの命令が出るんです。ウトロの人たちは、それで諦めて万歳して逃げるのではなくて、これはおかしいと。やはり、私たちの人権、居住権、そういう歴史的な背景があるんだということで、いろんな方に支援を受けて、最終的に土地の三分の一を買い取って、その土地の上に、宇治市が市営住宅を建てているという、物語がありますので、たくさんの人たちが、今の現状、その歴史的背景を学びに来ています。

これは一九四四年、戦争中に撮った米軍が撮影した当時の飛行場の一角のところの写真です。米軍が撮影したということは、ただの記念撮影ではなく、爆撃目標を定めるために撮影したという事で、深く戦争に関与してたところなんです。時々、この民間の問題なのだというのが、よくロジックとして使われるんです。いわゆる、従軍慰安婦問題も、民間企業がやったんだと言うんですよね。国際的な感覚の中では、戦争は国家が引き起こしたものですから、そういう戦時中において、国家、軍の承認であったり、要請であったり、そういったもので行われた事業は全

て国家、軍の責任に帰属するというのは、国際的な常識として通っているのですが、それに対する理解は、やはり日本では定着していないという状態で、放置をされることで、このような裁判が起こったというのも、歴史的な背景として言えます。また、もう一つ、すごく生活が苦しかったんですね。何かというと、浸水がとても酷かったんです。そのような状況の中で暮らされた人たちとも直接お会いして、お話しすることもありました。ウトロの人たちの生活状況なんです。二〇〇八年の統計では、生活保護率が二十%なんです。宇治市民の生活保護率って一%なんです。この数字を見ると、ヘイトスピーチをする人たちは、鬼の首を取ったように日本国民の血税を在日が生活保護で貪っているのではないかと。日本国民の血税という概念の問題性は先ほども言いましたが、そこには裏があって、年金受給率が極端に少ないんです。宇治市民の年金受給率は九十%に対して、在日の人たちは八%なんです。在日の人たちは一九八〇年代の中盤まで国民年金に入ることができなかったんです。年金制度というのは、年金納付期間というのがあります。それが二十五年だったと思うんですけども、もう今入っても、六十までその期間を満たせない人というのは、結局、年金をもらえないんで、掛け捨てになるんで入らないんです。そういう人たちが、制度的無年金者として残るわけで、これも、ヘイトスピーチをする人たちは、在日ば年金の保険料を払ってからもらうものなのに、年金保険料も払わないで欲しいと言っている、あいつらはとんでもないと言っているのですが、日本人は年金保険料を払わずに年金をもらうケースはたくさんあるんですね。何かというと、沖縄の方、小笠原の方、日本に返還されるまでは日本国民

ではなかったので、国民年金の納付義務はなかったんです。でも、日本に返還されたときに、この制度が支給されたときから全部入っていることにしますということをやっているんですね。これは朝鮮半島でも関わる問題なんですけど、拉致被害者の人たちも全部年金払っていたことにしましょうということになっています。もう一つ言えば、日本の国民年金制度は一九六二年に始まるのですが、一九六二年時点で、その二十五年を埋められない高齢者たちはどうしたのかと言いますと、老齢福祉年金というのを作りまして、そういう人たちには入ったことにして、保険料を納めていないけれども年金を支払うという日本人には手厚い政策が取られたにもかかわらず、外国人には日本人と同じような対策が取られることなく、制度的無年金者となった。そういう人たちは生活保護に頼らざるを得ない。そういう状況が構造的に作られている背景を無視しながら、血税云々という稚拙な論理で攻撃します。そういった人たちの言説が無視されればいいのですが、一部では、そういう人たちの言説を受け入れる流れもあるということと、とても危惧するところではあります。そういった経緯の中で、最終的には、今、たくさんの方々の支援によって、三分の一を買い取ってまちづくりが進んでるんですが、やはり、いまだに、こういうことに対する偏見、攻撃はたくさんあるんです。インターネットでウトロというところを検索していただくと、北海道以外のウトロはほとんどウトロの人たちの悪口で埋め尽くされています。ウトロでやっているハンゲル講座に通う子たちが、「先生、インターネットでウトロ出たで」と言い、どんなことが出てたと聞くと、「日本で行ったらいけない五個のうちの一つに入っていた」というんです。

年間千人の人が来てるのですが、そういう扱いをされているということなんです。

お話ししたいことが何点かあったんですが、割愛させていただきますが、ここはお話をしたほうがいいかなと思うんですけれども、ウトロの朝鮮人、当時、朝鮮人労働者は強制連行、制度的徴用ではないんです。一九三九年から始まる日本の制度によって、朝鮮人労働者を移入させるという政策の中で来た人たちではなくて、その前から来ている人たちなんです。だから、この一九三五年時点でも、朝鮮半島からたくさん日本に人が来ているんです。ならば、こういう人たちは出稼ぎ労働者で、自由意思で来た人たちですよ。金儲けのために来た人たちですから、なぜそういう人たちから歴史問題を言われたいといけないのかという話があるのですが、いつも私は思うのですが、そういう制度的に連れてこられた人以外で、なぜこういう人たちがいるのかという数字を考えると、植民地の目的とは、その国から人を連れてくることではなくて、逆なんです。植民することなんです。日本人はそこに植民、入植させることが目的なんです。入植させるのは何のためにさせるのか。そこでボランティア活動しなさい、その人たちの幸せのために奉仕しなさいとは違いますよね。そこで利権を取って、そこで財産を日本のものにするというのが植民地の基本的な考え方です。実を言いますと、だから、当時、日本から朝鮮に行った人の数字はなかなか把握されていなくて、当時、最終的には、終戦後、七十万人の日本人が朝鮮に行っていましたし、一九一〇年の時点では、もう既に十万人の日本人が朝鮮に行っているんですね。日本に来た朝鮮人は当時二六〇〇〇人いました。それに対して、もう既にたくさん日本人が朝鮮

に行っていたということ、朝鮮に行った日本人たちが、圧倒的な経済的な資本力、力を持って、朝鮮の土地、財産、そういったものを日本のものにしていくことで、その庶民たちの生活が破壊される。そこで生活がでぎずに日本に來ざるを得ないような状況が作られていたという、いわゆる、強制連行前史ともいいますか、そういったものも総合的に理解をしないとイケないのではないかと思います。そういった歴史的背景のある人たちなので、ちょっと乱暴な言い方すると、強制連行だったほうが分かりやすかったですね、この問題の事案としては。酷いねってなりますから。でも、それ以前の人たちも、決して故郷が嫌で、お金に目がくらんで、自由な選択があった中の一つの選択肢として日本に來たわけじゃないんですね。選択肢がそれしかなかったんです。それは、選択肢がないという時点で、社会的には強制だと私は思いますし、そういった問題も総合的に理解をした上で、そういう人々の人権とか生活を考える必要があるのではないかなと思います。

今ですね、コロナ禍の中でも、ウトロの人たちは一生懸命生活をしていまして、ウトロ地区でのコロナ感染者は、今、まだゼロに保たれている中で、韓国の人は、この間、たくさんマスクをウトロの人たちにといいことで寄附をしてくれました。二千枚を段ボールで送ってきてくれました。ウトロの人たちも高齢者が多いので、皆さんでこれを使ってくださいと言いますと、ウトロの人たちが、みんな大変なのに私たちだけがもらっていいのかということ、この半分を宇治市に寄附をしました。そうやって、宇治市からもたくさん支援をいただいでるので、この地域

の住民として、特に、日韓関係が凍り付いてる中で、私たちが、こういう日韓の市民、人々のつながりの大事な役割を担うということで、そういう寄附活動もしました。いろんな方とウトロで出会うことになりました。

冒頭にも申し上げたんですけれども、私の中にある、そのマジヨリティ性と言うんですかね、それなりに、すごく気付くこともありまして、そういうようなのも、しつかり私がマイノリティとして向き合っているのにも関わらず、こういうことを、衝撃的に捉えることで、すごく学びの場にもなりますし、いろんな形でこういう人たちとの出会いが生かされていることが、ウトロでもとても感じるところであります。

今、いろいろと振り返って思うこととしましては、やはり、その不条理というものと向き合うことの大事さっていうのを感じるんですね。本来しなくてもいいことを、社会の不条理が、それを強要しているものであって、強要されている側に、さらに私たちが強要するというのは、駄目なことなんですけれども、でもやはり、そこから目を背けたり、逃げるのではなく、しつかり向き合おうねと。休んでもいいんで、時々目をそらしてもいいんですけれども、しつかり向き合うことが大事なのかなと。そういった中で、いろんな人たちともつながりますし、自分の中にあるマジヨリティ性、自分の中でアツプデートしていかないといけない課題も気付かさせてもらいますし、そういう生き方が今、私にとっても充実感を与えてくれるのかなと思います。私の今の人生の目標というか、一番大事にしていることは、やっぱり子どもにとって、いい父親であった

いなど思います。だからといって、今から大儲けをしたり、テレビに出て大成功する余地は皆無だと思えますので、それが大事だとは思いませんが、私の中で、いつでも子どもたちに自信を持って、お父さんのことをアッパって言うんですけども、アッパは一生懸命生きたよと、一生懸命頑張ったよという、心の中で子どもたちと、常にそうやって向き合える親でいたいと思っていますので、今の生き方は、すごく足らないことはあるんですけども、多分、自分も死ぬとき、子どもの前で、いろいろ足らないことはあつたけど、一生懸命生きたと言える人間でいられるのかなと、そのような思います。やはり、つながることの大事さですね。それもとて感じることがありまして、本当に、人間愛という言葉が、すごい臭い言葉かもしれないんですけども、すごくそれに感じることもあるんですね。ウトロを支援して下さったたくさんの方々、本当に三十年以上、ウトロ地区と共に歩んで下さっている日本の方のおかげで、今の運動がずっと続いてきたというのがあります。その人たちは、なぜ、ウトロと共にしたのか。多分、言語化された理由はたくさんあるんですけども、やはり共通するのは、人としての愛、ほっとけないと。この人たちに何かをしてあげたいという素朴な関心から始まっているのではないかなと思います。そして、私の中にある、そのマジヨリティ性、常に自分がマイノリティであるからこそ、自分がマジヨリティに立つときのことに關して、常に警戒をしながら、向き合わないといけないなと思います。

差別は無くなるんですかとよく聞かれることがあるんですけども、差別は無くならないと思います。なぜ無くならないのか、やはり人間社会の中で、大なり小なり、そのような考え方は

ある、残っていくんですが、ただ、差別が無くならないと絶望するのではなくて、私自身の中にも差別性がありますので、差別を無くすというよりも、差別と向き合えることが一番大事なんじゃないかなと思います。私は、差別する心を、やはり持つてしまってる。そういう私を、常に自分と見詰め合って、自分と向き合って、自分は今差別をしていないか、その人の背景、ルーツをないがしろにしているか、本当にいろんな特性を持った人たちを尊重できているのか、常に自分に問いながら行動していく。そのような生き方が私としてやりたい生き方だと思っています、そのような話が自由に、フラットにできる社会になってほしいなと思っています。これは皆さん、御存じな言葉とは思いますが「情けは人の為ならず」というのは、人のためじゃなくて、もう自分のためにやっているんですよ。本当に今まで、若いときは、こういう在日の子のためにだとか、皆さんのためにだとか、この社会のためにと思っていたんですが、結局、自分のためであって、いい社会のために働きたいという自分のためにやっていることで、いろいろな人とつながりたい。そういう自分であるということを忘れずに、恩着せがましくなるようなこともなく、そういう姿勢をずっと貫いていくことが、私として生きていく中で大事ではないかなと思います。

今後、ウトロ地区は、このような本当に悲しい歴史を乗り越えて、いろいろな人たちのつながり、ここには日本人たちであつたり、韓国の人であつたり、在日の人であつたり、世界の人たち、いろんな人たちのつながりのおかげで、新しいステージ、まちづくりに行けたというこ

とで、ただの不幸話ではなくて、それを乗り越えた人々の生きざま、つながりの大事さ、そういったものを発信できる、すごく大事なところだと思っています。今、まちづくりでは、市営住宅第二期棟の建設に向けて工事が進んでいるのですが、同時に、ウトロに記念館を作ろうと思っています。この記念館もウトロの平和祈念館ということで、平和を祈る、祈念するという意味での館にしたいと思います。いろんな社会問題であるとか、歴史問題というものにスポットを当ててののですが、それは争いとか対立とか、どちらを屈服させるためではなくて、本当に人々の心の中の平和、幸せのための糧として、教訓としてしっかり踏まえるということで、人権と平和という普遍的な価値をしっかり守るという意味でそういう形で館の名前を考えています。日韓の青少年たちが、この場でいろんな歴史や、今の現在を見つめることによって、共に作っていける新しい未来とか、そういうものを考えられる、そういうところにしていきたいなと思っています。

最後にですね、今、アメリカの大統領選挙、結果はまだ出ていないですかね。どうなるのか分からないですけども、先日も講演会がありました、ある方が言っていたんですけども、今、新型コロナウイルスが世界に猛威を奮っていますが、もう一つ猛威を奮ってるウイルスがあると、言うんですね。それは何かと言うと、分断と対立というウイルスが今、蔓延してるというふうに言われるんですね。これは、病原菌のウイルスではなくて、やはり、その社会の閉塞感とか、人種差別であるとか、いろんな人々が分断されていて、対立をしている。そのウイルスが蔓延すると。新型コロナウイルスの特効薬、ワクチンは開発されてないけど、分断と対立を解消する

ワクチンは、もう既にあるんだと。それは団結であるとか、思いやりであるとか、相互理解であるとか、尊重であるとか、寛容であるとか、そういう気持ちは人類が培ってきたワクチンがあるから、分断と対立というウイルスはこのワクチンですぐに解消できるよということなので、ワクチンを投与するお医者さんが要りませんが、私の見る限り、今の政府には、それは期待できないなと思います。それでは、誰がするのかとなると、私は、市民がそれをしないとイケないのではないかと思います。そのようなワクチン、皆さんと、幸せと平和のワクチンを大きく、大手術はできないんですけれども、一人一人が持って、いろんなつながりを今後とも深めていって、そういうたきずなが作られていければなということを願っています、本当に拙い話ではございましたが、私のお話は以上とさせていただきます。どうもありがとうございました。(拍手)

○司会 金秀煥さん、ご講演ありがとうございました。

本日は、まだ少しばかりお時間がございます。皆様、金秀煥さんにご質問がある方はおられますでしょうか。挙手をお願いいたします。

○質問者A 今日には貴重なお話し、ありがとうございます。一つ、私自身は全然知らないのですが、国籍の問題ですね。若い人が例えば外国へ行ったりとか、勉強しに来たいと、留学したいというときに、その国籍の問題が出てくると思うんですけれども、在日韓国人とか在日朝鮮人という言葉があるんですけれど、僕も区別がちょっとつきにくいんですが、彼らの国籍はどこかなど、時々思うことがあるんです。もう一つ、最後のほうに写真が出ましたね、三人の。伊藤詩織さん

とか。真ん中の方は誰ですか。

○金秀煥 この真ん中の人は御存じですかね、ちゃんへん君といいまして、ウトロ出身の在日のパフォーマーで、このつながりで来ていただきました。

国籍についてなんですが、先ほどおっしゃっていた、私たちが在日コリアンの呼称、呼び方の問題ともすぐく関わるんですけども、在日朝鮮人、在日韓国人、在日朝鮮韓国人、在日コリアン、在日とか、いろんな呼び方があるんですけども、それはまた、国籍に規定されない呼び方であるというふうに思います。国籍というのは、皆様は日本国籍の方が多いと思うんですけども、私は朝鮮国籍なんです。韓国国籍もありまして、だからといって、在日韓国人、在日朝鮮人と分けることはないんです。国籍というのは、法律上、生活する上では大事かもしれないんですけども、その人のアイデンティティを考える上で、国籍って大事なという感じはあるんですけども、だから、アメリカとかヨーロッパですと、市民権という考え方でよし、国籍をもって自分のルーツであるとか、自分のバックボーンを規定するのは、それは私は正しくないというふうに思います。例えば、日本国籍を取る人、帰化っていうんですよ。帰化っていう言葉、帰るに化ける。私はその言葉がとても嫌で、何か帰属して自分を変える。だから、日本で市民権を得るといふことなので、日本国籍を取得するという言葉であるはずなのに、昔からの考え方なんです。律令制度まで遡るそうなんですけれども、そうやって帰化をするということ、自分のアイデンティティ、ルーツまでも変容させてしまうような、そういう考え方がイメージとして根付いていると

いうことがありますし、もう一つ、それは日本国籍もそうですし、韓国国籍でも、ちゃんへん君とかもそういう主張をしているんですけども、その朝鮮籍っていうのは、朝鮮民主主義人民共和国とか、大韓民国とか、そういう国じゃなくて、朝鮮半島にルーツを持つ人間として朝鮮籍を持ちたいのにも。でも、日本では、この朝鮮籍っていう国籍が認められていないんですよ。表記という扱いなんです。だから、大韓民国は国交がありますので、国家として認めるんですが、朝鮮籍というのは、朝鮮民主主義人民共和国との国交がないので、記号として、国籍としては認めない。そういうことなんで、日本では、その国籍を持っていない人の扱いになってしまってますね。便宜上、日本に変えるのも嫌だ、嫌って言ったら失礼になるかもしれないので、韓国籍にしようということ、在日朝鮮人というアイデンティティを持ちながら、韓国籍を持っている人もいますし、本当に、すごく多様な人たちなんです。私個人的な意見としては、もうややこしい呼び方はやめて、もう在日でいいんじゃないかなと思うんです。七十年間在日でやっていますから、そういう言葉も作っていききたいです。長くなって申し訳ないんですけども、ウトロの案内看板を作ったんですけども、英語で在日朝鮮人をコリアンインジャパニーズとか、何かそういう呼び名じゃなくて、もう括弧付きで、ザイニチって英語で書いたんです。そういう歴史的背景を含めても、そういう呼称であつてもいいんじゃないかという私の意見も最後にお話させていただきました。以上です。

○司会 ありがとうございます。よろしいでしょうか。他にご質問のある方、ございませんか。

○質問者B すみません、ちょっと一つお伺いしたいんですが、数年前に「焼肉ドラゴン」っていう映画を見たことがあるんですが、何か飛行場があった風景があったり、お話のあらすじをイメージすると、ウトロだったのかなって。もし御存じだったら、教えてください。

○金秀煥 ありがとうございます。「焼肉ドラゴン」の舞台はウトロではないんですが、その飛行場建設だとか、その朝鮮人労働者とかで、すごく類似地域としてあるんです。尼崎の中村地区というところになりまして、そこも飛行場の建設があったところなんです。だから、ウトロとすごく境遇が似ているということで、何が違うかと言うと、あそこは国有地だったんですね。だから、国と解決ができたんですけれども、ウトロは民有地だったということで、こちらはややこしくなったということで、ウトロ地区もいろんな運動をする中で、「焼肉ドラゴン」の舞台になった中村地区をすごくモデルとして参考にはして、いろいろ交流もしたんですけれども。実際は違うところです。

○司会 はい、他にございますか。

○質問者C ありがとうございます。先ほど、ウトロの住んでおられる方のパーセントが出てたと思うんですけども。ウトロに住んでおられる方の九十%以上が朝鮮半島から来た人と書いてあるんですけども、あとの十%の方っていうのは、在日の外国人の方なんですか。それとも、日本人の方ですか。九十%の方は、同じ思いを持って、同胞として生きていけると思うんですけども、ウトロに住む五十一番地の仲間として、どんなふうにコミュニティを深めているのか

聞きたいです。

○金秀煥 はい、ありがとうございます。とてもいい質問ですね、九十%以上、まあ、これは正式に統計も取っていないんですけども、一部日本人がいらっしやるんですよ。それは何かという、世帯、男性は在日の方で、その人と結婚した日本人の人だということですね。また、旦那さんに先立たれて、世帯主となってる日本人の方であったり、中には在日の人が暮らしていた家が空き家になるんで、それを譲り受けて入ってくる一部の人たちがいます。その日本人はウトロのコミュニティの中の位置付けはどうかということなんですけれども、まず、前提としてですね、ウトロの人たちは本当に差別されて、構造的な問題の中で苦労したんですが、全てがいい人じゃないんですよ。差別されている人は何かいい人でないといけないみたいな妄想があるんですけども、すごく人間チックなところで、助け合い、支え合いをしながら、裏で文句も言ってますし、すごく人間臭い町なんです。そういつた中で、日本の人たち、当然、そのウトロのコミュニティ、町内会の輪にも入っていますし、在日の人よりも、コミュニティの出席率の高い人もいらっしやいますし、当然、私たちセンターのところ、ウトロ地区が水害になったときに、水害世帯に慰問金を支給するときも国籍に関係なく支給しています。町内会として何かを排除したりしていることはなくて、町内会としては一緒のメンバーとしてやっていますけども、やっぱり、中には若干のわだかまりがあったり、だからといって、喧嘩をしているとかではなくて、本当に人間臭い付き合いがそこにはあると私は思っています。答えになっていますでしょうか。

○司会 よろしいでしょうか。では、次に、質問のある方。

○質問者D 分かりやすいお話し、ありがとうございます。

質問なんですけれども、私も全然無知なんです、学校の話なんです、日本、外国にある日本語学校とかでは、日本が補助を出したりとかするのか。友達も行ってたんで聞いたことがあるんですけども、日本にある朝鮮学校ですか、そこにはやっぱり向こうの、朝鮮のほうからは支援金っていいですか、その運営費とかはもらえるのでしょうか。どうやって運営されるのかなってというのが聞きたいです。

○金秀煥 はい。ありがとうございます。私たちが在日の民族学校というのは、大きく二種類で、朝鮮学校という、いわゆる朝鮮民主主義人民共和国系の学校と、あと、韓国系の学校もあるんです。両方いずれもお金は政府から出ています。だからといって、運営にほとんど差し支えない話ではなくて、やはり、補助金程度になるんですね。両方出ていることは出ています。ただ、御存じのとおり、大韓民国はそれでも経済的に安定はしているんですけども、北のほうはそうではなくて、朝鮮民主主義人民共和国が朝鮮学校に教育の支援金を初めて送ったのが、一九六二年なんです。当時、二億円のお金を送って、それは在日社会で大衝撃だったんです。あの国が海外の朝鮮学校のために、二億円を送ってくる。当時の二億円ってすごいお金ですから、そのときに、本当にみんなが感激してたんです、現在も二億円程度は送られてくるのですが、昔の二億円と、今の二億円は全然違います。各学校に配分される分は少ないんですけど、国からは出ています。

他の日本人学校とか、海外は、いろんな形で財団が支援したり、保護者が支援したり、アメリカでしたら、州政府が支援したり、そういうケースもあるそうです。やはり、民族、歴史的な背景の考え方とか、そういった考え方の中で、やはり、税金を払っている人たち、ないしは、歴史的な背景で、その民族教育を受けさせたいという人たちの思いで、思いに寄り添った公的な支援は、あつてしかるべきだと私は思っています。もう一つ言いますと、インターナショナルスクールってございますよね。あそこはあまり日本政府、国庫の補助はないというふうに聞いているんですけども、指定寄附金制度というのがありまして、学校を改修するとか、大型なお金を集めるときは、税金が免除されるんです。インターナショナルスクールは指定寄附金制度が適用されるんです。朝鮮学校は適用されないんですよ。それを、ある国会議員が問題じゃないかって追及したんですね。文科省の当時の役人の答えは、インターナショナルスクールは海外からたくさん人が来て、国際交流にすごく役立っているので、公益性のある学校であると。でも、朝鮮学校は、元々住んでいる人たちですから、公益性が認められないから支援から外すというふうな見解なんです、正式な見解が。自分の子どもが通っている学校が公益性がないと言われる、この辛さっていうのは、ぜひ皆さんにも理解していただきたいなと思います。以上です。

○司会 時間がそろそろなくなってまいりまして、すみません、次の方で最後までさせていただきます。

○質問者E 秀煥さんのお話しを聞かせていただいて、私も日本人として、やっぱり、この日本

社会をもっともつと変えていく一人でありたいなということを本当に痛感いたしました。今日はありがたいございました。私は、この枚方からの在日の子どもたちも通つて城北朝鮮初級学校を支える会をやっております。二〇〇九年に立ち上げまして、大阪には朝鮮学校が、今まで十校あったのですが、九校になりました、中学校と一緒になりましたから、その全部集まった、いろんなところに支える会があるのですが、高校無償化からの除外がありまして、適用されなないということから、高校無償化連絡会というのを作りましてね、それで、もう今年になるのですが、毎週火曜日に四百回、前で立ち続けて、日本人に、それから、府庁の職員の方々に、補助金の再開と、それから無償化適用、そういったことを訴えております。そういう中で、日本人がやっぱりほとんど知らないということを、今日またいろいろお話しを聞かせてもらって、本当によく分かりました。今は、コロナ禍で、大学生に補助されるべき緊急給付金というのを皆さんは御存じでしょうか、学生支援緊急給付金。それが朝鮮大学校だけは出されていませんね。それから、幼児教育無償化からも、適用されていない。そういった意味で、高校無償化から三歳児の子どもまでの朝鮮学校が、全部除外されていくという現状です。無償化の裁判が地域で行われていたのですが、先ほど広島の話もされました。私もそこに行きました。秀煥さんとも会って、いろいろ話しをしましたが、無償化の地域の裁判がごとごとく、全て敗訴になっているんです。それが、全部結論ありきなんです。たった一つ、大阪の一審の地裁判決のみ、きちんと民族教育と朝鮮学校の意義を認めました。そういった本当の当たり前の判決が出たのに、あとは、全てもう何も教育の

ことに関係してない。だから、私は、この日本社会が公的な差別をやっていることを、私は日本人として許すことができないということを、今日、金先生のお話を聞いて、改めて思いました。情けは人のためならず、私のために、この日本社会のために頑張りたいと思います。

○質問者F 今日、いろいろお話を聞かせていただきましてありがとうございます。一つだけ質問なんですけれど、朝鮮学校っていうのは、基本的には、日本人の考え方としては、北朝鮮の民族意識というよりは、北朝鮮の思想の中から生まれた学校のような感じがするんですけど、今、先生は、出身は韓国だとおっしゃった。そういう意味で、朝鮮学校の中でですね、どの程度の割合で、北と南があるのか。現状だけでもいいのですが、少し教えていただき、我々は北の出身の方か、そういう方しか朝鮮学校に行かないんじゃないかというふうに思っているところがあると思います。聞かせていただけたらと思います。

○金秀煥 朝鮮学校についてですね。よく、北の思想的な話、国家と位置付けられるんですけども、基本的に、教育って国家の思想に基づいて、僕は作られると思うんですね。日本の学校もやはり、アメリカの学校もやはり。そういった中で作られている学校ということを前提に、今おっしゃっていたような、朝鮮学校における、これもさっきの国籍の話と一緒に、それをどうやって分類するのかっていうのはすごく問題なんです、アイデンティティの分類ではなく、ただ国籍で言いますと、最近では、韓国籍の子が多いんです。出身で言えば、ほとんど祖父母が南側から来た人が、これは九十%と言っても過言ではないと思います。

○質問者F その中に済州島出身の方も結構多いんでしよう。

○金秀煥 はい、そうです。本当に多様な人たちが通っています。当然、日本国籍を持っている方もいらつしやいますし、ダブルで、今は基本的に、日本の国籍に編入されるんで、日本籍の方もたくさんいらつしやいます。

○司会 ありがとうございます。それでは、講師を務めていただきました金秀煥さんに、皆さんから盛大な拍手を頂戴いたします。ありがとうございます。（拍手）

それでは、これで第三回講座「生きること」を終了させていただきます。